

日本語の語用論的構造について

正 宗 美根子 *

On the Pragmatic Structure of Japanese

Mineko Masamune *

Received September 5, 2003

最近、語用論⁽¹⁾の研究が盛んである。語用論は、言語そのものではなく、言語運用面から言語を分析する立場をとり、その扱う範囲が非常に多種多様である。

この論文は、日本語では、言語運用すなわち語用論のレベルで、様々な規制が働くことを検討したものである。I では、日本語が、聞き手主導型の言語であり、話し手と聞き手との共話の形で会話が進むので、言語運用レベルの分析が重要になることを、具体例をあげて示し、II では、言語運用面で働く規制について検討した。話し手主導型の言語である英語では統語レベルで働く特定か不特定という規制が、日本語では語用レベルで働くことを提案した。

I 日本語は、聞き手主導型の言語である。従って会話は、話し手と聞き手との共話の形式で進む。

I-1 はい と いいえ について

- (1) わかりますか? はい、わかります。 (Yes, I understand.)
(2) わかりませんか? はい、わかりません。 (No, I don't understand.)
(3) わかりますか? いいえ、わかりません。 (No, I don't understand.)
(4) わかりませんか? いいえ、わかります。 (Yes, I understand.)

(1)(2)の例から分かるように、日本語の はい は、質問の文をそのまま繰り返し、あなたのおっしゃる通りです という意思表示である。それに対して、いいえ は、(3)(4)の例から分かるように、あなたのおっしゃることとは違います という意思表示である。()の英文の訳から分かるように、英語の yes は、質問には関係なく 私の答えは肯定です、no は、私の答えは否定です という意思表示である。相手の発言とは無関係に、自分の言いたいことだけ表明しているのである。

日本語で、あいづちに使われる はい も、あなたのおっしゃることをちゃんと聞いていますよ という意思表示である。英語の yes no が、相手の質問文の形式とは無関係な答え

* 外国語学部
Faculty of Foreign Languages

であるのに対し、日本語では、相手の質問文に関わった答えになる。

I - 2 断片文について

(5) 明日お休みをいただきたいんですが……………

(6) 明日うちへいらっしゃいませんか？ ちょっと……………

(7) ペンを下さい。 ありませんが……………

(5)(6)(7)の例では、話し手は、最後まではっきり言わないで、判断を聞き手にゆだねている例である。日本語の会話では、(5)のような文末にの(ん)ですのついた拡張述語が多いのも、話し手の側で、一ですという言い切りの断定を避けて、判断を聞き手にゆだねていると考えられる。(6)では、話し手のちょっとという短い断片文だけで、聞き手は、相手が自分の家に来ないと判断する。(7)では、はっきりありませんという言い切りの形ではなく、ありませんがという断片文にすることで、聞き手の判断を仰ぐという形をとっている。

I - 3 句の主要部とその語順について

(8) わたしが書いた本 (the book which I wrote)

(9) 昨日は、学校へ来ませんでした。 ((I) didn't come to school yesterday.)

(10) 朝から (from morning)

(8)は名詞句、(9)は動詞句、(10)は後置詞句(英語では、前置詞句)である。名詞句、動詞句、後置詞句(前置詞句)それぞれの主要部(head)は、名詞、動詞、後置詞(前置詞)である。英語は、主要部が前に来るのに対し、日本語では、全部後ろである⁽²⁾。すなわち最後まで聞かないとその句の中心の意味が分からないのである。話し手は、最後まで、自分の立場をあいまいにしておいて、相手の反応によって、肯定である自分の立場を話の途中で、否定に変えることもできるのである。

I - 4 人称暗示機能について

(11) 昨日 歯を抜いたから、今日は、気分がすぐれません。

(11)の動詞 抜く は、動作動詞であり、主語は、英語では、動作主しか使えない。すなわち自分で抜かない限り主語はⅡ人称かⅢ人称である。ところが、日本語では、自分で抜いたのではなくても、(11)の文は、可能である。すなわち(11)の主語は、Ⅰ人称も可能である。もちろん授受動詞を使って、抜いてもらったという言い方も出来、この場合の主語は、Ⅰ人称を使うことは出来ない。日本語では、主語の省略が非常に多く、抜くのような動作動詞では、主語を省略することで、聞き手は、抜くという動作の動作主を、Ⅰ人称にも、Ⅱ人称にも、あるいはⅢ人称にも解釈することができる。

前後関係から、人称が決まってしまう表現も多くある。聞き手は、話し手が言及しない場合でも、聞き手の側で正確な人称を把握できる例である。

(12) お書きになりました。 (You/He/She wrote it.)

(13) お書きしました。 (I wrote it.)

(12)は、尊敬形で主語は言及されなくても、必ずⅡ人称またはⅢ人称である。(13)は、

謙譲形で主語はⅠ人称しか取れない。

(14) 悲しい。 (I am sad.)

(15) 悲しいですか。 (Are you sad?)

(16) 悲しがっている。 (He/She is sad.)

感情を表す形容詞の場合、(14) のような終止形の主語は、Ⅰ人称であり、(15) のような疑問文の主語は、Ⅱ人称であり、(16) のように ーがる のついた場合の主語はⅢ人称である。

(17) 学校に行こうと思う。 (I think I will go to school.)

(18) 学校に行くだろうと思う。 (I think he/she will go to school.)

引用の と に 思う が続く場合、引用内が、意思を表す助動詞で終われば、行くの主語は、Ⅰ人称である。推量の助動詞で終われば、行く の主語は、Ⅲ人称である。

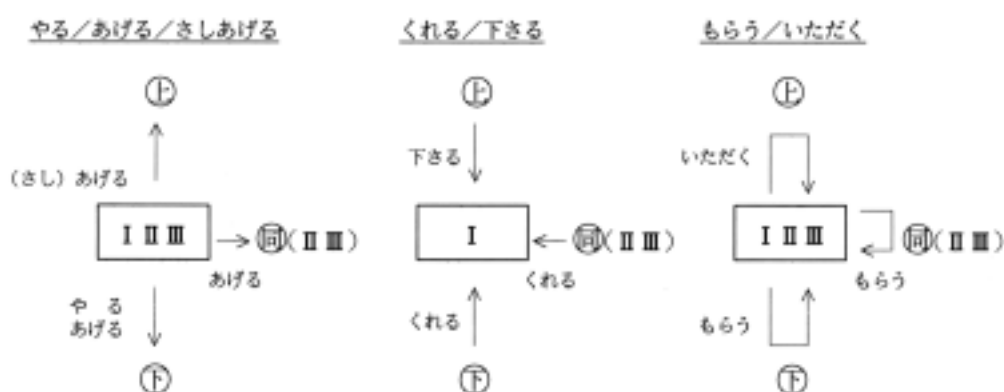
(19) 行くはずです。 (He/She is expected to go.)

(20) 行くつもりです。 (I intend to go. I expect to go. I plan to go.)

(21) 行くつもりですか (Do you intend to go? Do you expect to go? Do you plan to go?)

ーはずだ は (19) のように、Ⅲ人称を主語として取り、一つもりだ は、叙述文では(20) のように、Ⅰ人称を主語に取り、疑問文では (21) のように、Ⅱ人称を主語として取る。

日本語には、物の授受、動作の授受を表す表現がある。物の授受は、英語では、give receive の2語で表されるのに対し、日本語では、やる あげる さしあげる くれる 下さる もらう いただく という 7個の動詞で表す。又、動作の授受は、ーて形 をつけて、ーてやる ーてあげる ーてさしあげる ーてくれる ーて下さる ーてもらう ーていただく の 7通りの表現で表す。物の授受による使い分けを図示すると、次のようになる⁽⁴⁾。動作の授受の使い分けも、この図と同じである。



㊦㊦ は、聞き手が目上にあたるのか 目下にあたるのかの使い分けを表す。㊦ は、立場が同等であることを表す。Ⅰは、Ⅰ人称を含めたⅠ-groupを表し、ⅡはⅡ人称を、ⅢはⅢ人称を表す。

図から分かるように、くれる 下さる の受け手は必ずⅠ人称である。又、やる あげる

さしあげる の受け手はⅠ人称をとることは出来ない。もらう いただく の動作主は、Ⅰ人称をとることは出来ない。(22) は、書く という動作の授受の例を示したものである。(22) の () の中の日本語は、だ体 と同じ内容の文を、聞き手に対して丁寧に述べる ですます体 の文である。だ体 は、くだけた場で使われ、ですます体 は、かたくるしい場で使われる。

- (22) 書いてやる (やります)。 (I/You/He/She will write it for you/him/her.)
 書いてあげる (あげます)。 (I/You/He/She will write it for you/him/her.)
 書いてさしあげる (さしあげます)。 (I/You/He/She will write it for you/him/her.)
 書いてくれる (くれます)。 (You/He/She will write it for me.)
 書いて下さる (下さいます)。 (You/He/She will write it for me.)
 書いてもらう (もらいます)。 (You/He/She will write it for me/you/him/her.)
 Lit. I/You/He/She received the writing of it by you/him/her.)
 書いていただく (いただきます)。 (You/He/She will write it for me/you/him/her.)
 Lit. I/You/He/She received the writing of it by you/him/her.)

日本語には、同じ表現が、人称が異なると、異なる意味を示す例もある。

- (23) きの中、行かれました。

日本語の られ (る) には、受身 尊敬等の意味がある。(23) の文の表面に主語は現れていないけれども、Ⅰ人称が主語であると聞き手が解釈すれば、被害の受身の意味になり、Ⅲ人称に解釈すれば、尊敬の意味になる。話し手は、通常の会話で、主語に言及しないことが多く誤解の生まれるところである。

I-5 条件を表す なら について

久野⁽³⁾ は、S1ならS2 構文において、S1なら に含まれる主語 (行動主) は、話し手ではなく聞き手すなわちⅡ人称 (あるいは人一般) であるとする。

- (24) 寒いなら、もっと着なさい。

久野は、(24) の文は、(25) であると分析している。

- (25) (あなたがおっしゃるとおり) 寒いなら、もっと着なさい。

- (26) * (私が) 寒いなら、もっと着ます。

(26) が、非文法文になるのは、(27) が出来ないからだと分析している。

- (27) (あなたのおっしゃるとおり) (私が) 寒いなら もっと着ます。

すなわち、条件文の なら は、相手 (聞き手) の言ったことを、話し手が自分の文の中に取り込んで表現する形をとり、会話を話し手と聞き手の共話の形で進める日本語の特徴を表している。

I-6 談話標識の それでは (では、それじゃあ、じゃあ) について

- (28) A: ちょっと ご相談したいことがあるんですが.....

B: それでは、明日3時に来て下さい。

では それじゃあ じゃあ は、それでは のくだけた言い方で、それでは では それじゃあ じゃあ の順で、かたくるしい言い方から、くだけた言い方になる。それでは 及び

では それじゃあ じゃあ は、相手の発話内容（の一部）を受け入れて了承したことを表す。

I-7 だ体 と ですます体 について

(22) の例から分かるように、日本語には、同じ内容を伝達するのに、聞き手に対して丁寧に述べる ですます体 とそうではない だ体 がある。すなわち、日本語では、聞き手によって、話し手は、異なる表現形式を使用する。

I-8 和語 漢語 洋語について

日本語の語彙には、ほぼ（暗示的意味は異なるが）同じ意味を表すのに、日本古来からある和語 と、中国から来た 漢語 と、西洋語から来た 洋語 の使い分けがある。購入する—買う 売却する—売る 紙（かみ）—ペーパー といった対応である。この使い分けも、だ体 と、ですます体 の使い分けと同様、聞き手によって使い分けられると考えられる。

I-9 謙譲表現について

(29) (私が) お書きします／お注ぎします。

(30) (私が) お伝えします／お呼びします／ご連絡します。

(31) * (私が) お立ちします／（橋を）お渡りします。

(29) (30) が文法文で、(31) が非文法文になる理由は、使われる動詞の性質によるものである。すなわち、聞き手のために話し手が行なう動作を表す場合にしか謙譲表現は使用出来ないものである。(29) は、話し手が直接聞き手のために行なう動作の例であり、(30) は、話し手の行なう 伝える 呼ぶ 連絡する という動作が、間接的に聞き手の利益になる例である。(31) は、話し手の 立つ （橋を）渡る という動作が、聞き手のために行なわれるという特殊なコンテキストがない限り非文法文である。

I-10 指示代名詞について

日本語の指示代名詞 これ それ あれ の中の、それ と あれ には、次のような使い分けがある。

(32) A: 新しい言語学の本が出版されました。 (A new book of linguistics was published.)

(33) B: その本、だれが書いたんですか。 (Who wrote the book?)

C: あの本、だれが書いたんですか。 (Who wrote the book?)

日本語では、(32) の質問文に対して、(33) の B と C のような二通りの答えが可能である。(33) の例では、話し手は、情報を聞き手と共有していると判断した場合に、指示代名詞 あ の系列のもの (33C) を使い、共有していない場合は、そ の系列のもの (33B) を使う。

I-11 終助詞 よ と ね について

(34) 外は、寒いですね。 (It's cold outside, isn't it?)

(35) 外は、寒いですよ。 (It's cold outside.)

日本語では、話し手が、聞き手と情報を共有していると判断する場合は、(34) のように、

終助詞 ね を使い、共有しない場合は、終助詞 よ を使う。すなわち、話し手は、聞き手との情報の共有の有無で、終助詞を使い分けるのである。

以上Ⅰ－１からⅠ－11で示した例は、日本語の会話が聞き手主導で進むということを示す例である。

Ⅱ 日本語の語用レベルで働く規制について

Ⅰの項で検討したように、日本語は、聞き手主導型の言語であり、自分の発話の中に相手の発話を取り込んだり（Ⅰ－1 Ⅰ－5 Ⅰ－6）、省略が行なわれる結果、人称の決定が聞き手の側で行なわれる（Ⅰ－4）。又、聞き手と深い関わりをもつ用法（Ⅰ－2 Ⅰ－3 Ⅰ－7 Ⅰ－8 Ⅰ－9）があり、聞き手との情報の共有の有無（Ⅰ－10 Ⅰ－11）など、統語レベルで処理出来ない要素が非常に多くある。この用法は、英語のように統語レベルで処理出来ない要素である。どのような規制が働くのかは、これからの検討課題である。

日本語には、表層は、同じ表現であるのに、使われる相手によって、基本的意味（明示の意味）はかわらないが、周辺の意味（暗示の意味）が大きく変化する用法がいくつかある。この違いを説明するために、特定の相手か不特定の相手かということが、大きく関わる。

この項では、英語の定冠詞、不定冠詞の用法を決定する特定か不特定かという規制が、日本語では、英語とは意味が異なるけれども類似した規制が語用レベルで必要になることを例をあげて提案する。

Ⅱ－１ 呼称について

日本語の親族呼称には、虚構的用法があり、特定（よく知っている あるいは 自分の権限の及ぶ）の親しい間柄で使われる呼称が、同じ年代のまったく見知らぬ不特定の他人に対しても、用いられる。自分の伯父、伯母、兄、姉等、親族に対して使う おじさん おばさん おにいさん おねえさん 等の呼称を、不特定の他人に対する呼称として使用する。

又、日本語の呼称の、おっさん おばはん は、不特定の他人に対して使うと、侮蔑的な響きを持つ。ところが、同じ語が、特定の親しい親族に使われると、親愛を表す意味を持つ

Ⅱ－２ 命令依頼表現について

(36) 次の文を日本語に訳せ（読め 書けetc）。

(36) の例は、試験問題等でよくみかける命令形である。不特定多数に対する中立の命令表現である。同じ表現を、特定の聞き手を目の前にした命令文にすると、乱暴で強い表現になる。

(37) ここに名前を書いて下さい。

一て下さい という表現は、不特定多数に対して使われる最も一般的な表現である。しかし、特定の相手に使う場合、目下には、使えるが、目上に対しては使えないという用法制限がある。

(38) 都合で本日は休業させていただきます。

(39) 実家に帰らせていただきます。

一させていただく という言い方は、店の張り紙等でよく見かける穏当で丁寧な表現である。しかし、(39)のように、妻が、特定の聞き手である家族に対して使うと強い響きをもつ。

(38)の例を、日本語が聞き手主導型の言語であるということとの関連で述べると、(38)に 使役 させる が使われているということは、相手の許可を得て休業することを意味する。すなわち、存在しない相手を想定して、その人の許可を得て休業することにして、勝手に休業することのお墨付きをもらったように見せかけているのである。日本語が聞き手主導型の言語であることを悪用(?)した例である。

上の例から分かるように、話し手主導型の英語が、統語レベルで、規制がかかる(たとえば、a と the を使い分ける 特定 不特定等)のとは対照的に、日本語では、I の例のように、会話は、聞き手主導で進み、話し手と聞き手との共話の形をとることが多く、談話のレベルが、英語の構文レベルに相当する。従って、語用のレベルで、英語の統語レベルで働く規制が必要になると考えられる。IIの項では、語用レベルで働く規制の一つとして、特定の相手か不特定の相手かの違いが、日本語の呼称、命令依頼表現に深く関わっていることを検討した。

註

- (1) 言語学では、個別言語の記述研究は次のような研究分野に分けて行なわれる。
 - 音韻論 (phonology) 音形記述
 - 文法論 (grammar)
 - 形態論 (morphology) 語の構造、構成
 - 統語論 (syntax) 文の構造、構成
 - 語彙論 (lexicology) 語の体系、特徴
 - 意味論 (semantics) 字義通りの意味の研究
 - 語用論 (pragmatics) 発話の意味、形式をコンテクストの諸要素との関連で研究する分野
 - 語用論の研究として、グライスの協調の原理、その修正である、スベルベルとウィルソンの関連性理論等がある。
- (2) 筆者は、以前日本語教育に携わり、現在は英語教育に携わっている。きちんとデータをとって確かめたわけではないが、主要部が前である英語を母語とする人が、主要部が後に来る日本語を学習する方が、その反対である日本人、すなわち主要部が後の日本語を母語とする日本人が、主要部が前に来る英語を学習する方が、負担が大きいように思われる。主要部を前から後ろに移すほうが、その逆の操作を強いられる学習より、負担が軽く修得が容易だと推測される。うまく測定する方法があれば、調査してみたいテーマである。
- (3) 日本文法研究 久野 暉 大衆館書店 (1973) pp102-103
- (4) 話せる英語を目指して 正宗美根子 北陸大学紀要 (1989) p64

参考文献

- 石黒昭博他 現代の言語学 金星堂 1999
 大江孝男 言語学 放送大学教育振興会 1999
 加藤彰彦他 日本語概説 おうふう 2000
 菊地康人 敬語 角川書店 1994
 久野 暉 日本文法研究 大修館書店 1973
 Jorden, Eleanor Harz: Beginning Japanese part I part II Charles E. Tuttle Company, 1986
 鈴木孝男 ことばと文化 岩波新書 1989
 正宗美根子 話せる英語を目指して 北陸大学紀要第13号1989
 正宗美根子 日本語におけるウチソトの使い分けとコソアとの関連について 北陸大学紀要第19号1995

正宗美根子 日本語におけるウチソトの使い分けと呼称について 北陸大学紀要第20号1996
正宗美根子 日本語の命令依頼表現について 北陸大学紀要第24号2000